

## 卒業論文の要旨

論文題目	視覚障害者を取り巻く対人コミュニケーション課題
氏名	山口直樹
メジャー	コミュニケーション学
<p>(要旨)</p> <p>視覚障害者を取り巻く対人コミュニケーション課題とその所在を明らかにし、視覚障害者とコミュニケーションする相手が配慮すべき事柄について検討する。</p> <p>2017年に障害者総合研究所が行った調査では、326名の障害者のうち59%が日常で差別や偏見を感じ、その中で最も差別を感じる場所が職場だった。また、2017年の内閣府による世論調査では、有効回収数は1,771人の内、障害を理由とする差別や偏見が「あると思う・ある程度はあると思う」者の割合が83.9%となった。さらに厚生労働省の報告(2017)によれば、障害者の離職原因に職場の雰囲気や人間関係が挙げられた者は、精神障害者の場合1位、身体障害者は2位であった。障害者とのコミュニケーションに日常生活や職場で誤解や差別など人間関係上の多くの問題があることがわかる。一方、中野・相羽・小松(2014)は、弱視者を対象に対人コミュニケーションの困難さと当事者の工夫についてアンケート調査を行い、弱視者が相手の顔が見えないために感情がよめない等の課題があることがわかった。しかし、対象者に全盲者がいないこと、また、対人コミュニケーションは双方向で行われるが当事者以外が工夫すべきことは含まれていないなど課題が残った。先行研究が、健常者の研究者からによるものが多いため、当事者の視点が十分に反映されていないという限界がある。</p> <p>本研究は、視覚障害者である研究者が、当事者による視点から、全盲者を含めた視覚障害者8人への対人コミュニケーション上の課題について、半構造化面接を行い、その結果をグラウンデッド・セオリー・アプローチカテゴリー生成をした。</p> <p>視覚障害者を取り巻く対人コミュニケーション課題は、「他者理解」「障害開示」「非言語情報」「指示語」「障害者からのコンタクト」「その他」に分けられた。障害者は健常者のみでなく、他の障害者に対しても困難を感じていた。問題の所在と、それへの工夫は、当事者だけでなく、会話の相手、両者間にみられた。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>視覚障がい者の研究においては、健常者の研究者による障がい者へのサポートのあり方についての課題が圧倒的に多い。本研究は、視覚障がいの当事者が、障がい者に対人関係についてどのように困難を認識しているかを聞き取った点が貴重であるといえる。障がい者は、自身の障害開示の困難や、非言語行動の読み取りの困難、また、健常者だけでなく障害者どうしの間での困難もあることなど、これまでの研究では取り上げられなかったコミュニケーション上の問題が明るみにでたことに意義がある。</p>	